

新自由主義の国際的拡散：サッチャーの果たした役割

池 本 大 輔

1. 問題の所在

ブレトンウッズ体制崩壊（1973年）以降の20年間で、国際金融の構造は大きく変化。

ブレトンウッズ体制（「埋め込まれた自由主義」）

- ・国内における福祉国家の建設+国際経済の穏健なグローバル化
- ・ガットをつうじた貿易の自由化 ⇔ 国際資本移動の制限

しかし1970年代から80年代にかけて、ほとんどの先進国が資本管理を撤廃（Rodrikいうところの「ハイパー・グローバル化」の時代）

- ・国際資本移動の増大→金融セクターの規制緩和→金融のグローバル化
- ・国際金融センターとしてのシティの隆盛 ⇔ 英国製造業の決定的衰退

新自由主義の実践にとって持つ重要性にもかかわらず、資本管理の撤廃過程に関する研究は僅か（⇔マネタリズム・金融規制緩和）。そこで本報告はサッチャー政権による資本管理の全廃（1979年）をめぐる政治過程を扱う。

本報告の構成

- ①資本管理とは何か、資本管理撤廃の重要性
- ②資本管理撤廃の政治的・経済的背景
- ③サッチャー政権内の議論、主導的な役割を果たしたのは誰か

本報告のサッチャー政権・イギリス政治研究に対する貢献

- ①サッチャー政権による資本管理撤廃を扱った研究は少ない
 - ・技術の進歩、国際的な生産構造・金融媒介の変化のため、先進国は1970年代末から90年代初頭にかけて相次いで資本管理を撤廃したという見方がある（Goodman and Pauly 1993）。

↑

この見解は国家が果たした役割を軽視（Helleiner 1994）。米英両国による先行的な動きが、日本・大陸欧州諸国に対して追従するよう圧力として働いた。

定例研究会

- ・他方で、グローバル化は階級権力再建のためのプロジェクトであり、貧富の格差の拡大はグローバル化の「存在理由」であるという見方もある（Harvey 2005）。

↑

資本管理撤廃当初の政策決定担当者の意図に限ればこれは言い過ぎ。

- ・世界経済におけるマクロ不均衡への対処～黒字国から赤字国への資金の還流を促す先進国（アメリカ⇔日本・西独）

産油国

↑

資本管理の撤廃が国際収支の問題に与える影響は政策決定担当者にも理解されていなかった。

イギリスは北海原油のおかげで黒字国になることが議論の前提。

②1979年はイギリス戦後政治にとって断絶点なのか

- ・近年の研究は「戦後コンセンサス」論を相対化する傾向（Needham 2014; Williamson 2015; Thomson 2014）

←資本管理に限って言えば1979年はやはり断絶点

③サッチャーの個人的な役割は小さい

- ・サッチャーは関係閣僚の中で最も資本管理の撤廃に消極的だった。製造業を守るため、資本流入に対して新たな規制を導入しようとさえした。しかし、ハウ蔵相など他の閣僚に説得された。
- ・サッチャーが父から受け継いだ「信念」と政権の実際の「政策」との間の乖離→「信念」に対する懐疑的見方（Campbell 2001）。本報告は、むしろサッチャーの有した政策影響力が（とりわけ政権初期には）限定的だったために乖離が生じたと主張。

2. 資本管理とは何か

(1)資本管理とは何か

資本管理＝政府・中央銀行・その他公的機関による、居住者の外国資産保有（資本流出）・非居住者の国内資産保有（資本流入）に対する規制

第二次大戦後のイギリスの問題は自国通貨のポンドが弱いことだったので、居住者の外国資産保有に対してとくに厳格な規制が導入された。

- ①1947年制定の為替管理法による資本取引（直接投資・間接投資）の規制
- ②經常取引（貿易等）に伴う資本移動はブレトンウッズ体制で既に自由化

(2)資本管理の撤廃はなぜ重要なのか

- ①国家の経済介入が減少
- ②労働と資本の力関係が後者優位に変化
 - ・マネタリズムと共に、労働組合の交渉力を削ぐ手段
 - ・労働分配率の低下と貧富の格差の拡大に貢献 (Furceri and Loungani 2015; Jayadev 2007)
- ③ケインズの需要管理政策の実施が困難に
- ④金融のグローバル化
 - ・金融ビッグバンは短期資本移動自由化の論理的帰結
 - ・直接投資に対する規制の撤廃は多国籍企業の国境を越えた活動を促す
- ⑤政権の経済政策論争の構図を規定
 - 固定相場制、金融政策の自律性、国際資本移動の自由化の三つのうち、同時に実現できるのは二つまで (マンデル=フレミングの法則)
 - ・サッチャー首相、ウォルターズ→金融政策の自律性+国際資本移動
 - ・ハウ、ローソン→固定相場制 (ERM) + 国際資本移動

3. 資本管理撤廃の経済的・政治的背景

政策転換を可能にした三つの要因

- ①ブレトンウッズ体制の崩壊
 - 固定相場制と需要管理政策を両立させるために資本管理は行われていた。
- ②北海原油の生産開始
 - イギリスの経常収支は1980年代初頭に黒字に
- ③マネタリズムにもとづく金融政策への転換
 - 資本管理を撤廃しても大規模な資本流出が起こる懸念は後退

ただし、これらの要因は資本管理の撤廃を必然的にしたわけでも非論争的なものにしたわけでもない。

4. 政府内部の議論

(1)主要なアクターの立場

ハウ (蔵相)

- ・「哲学的理由」で「全体主義的」な為替管理に反対 (Howe 1995)。
- ・ERMに参加する前に、為替管理を撤廃してポンドを下落させる必要

ノット (貿易相)

- ・国家の経済に対する介入を減らし、労働組合の力を削ぐために為替管理の撤廃は不可欠。
- ・ポンドの国際的役割の復活を目指す (!)

大蔵省・イングランド銀行

- ・当初はマイナーな制限の緩和を支持（←保守党政権を信用せず）
- ・やがて全廃を支持する方向に（「自由の誘惑は強い。もしわれわれが現政権の下で制限的なシステムを解体できないなら、われわれは一世代かそれ以上にわたって為替管理と共に生きなければならないかもしれない」）

(2)為替管理を撤廃した場合に生じうる問題

①マネタリズムの遂行が困難になる

為替管理を撤廃→銀行は国外に拠点を移すことで政府の直接的なコントロール（コルセット）を回避できる→国内通貨供給量の管理は困難に

②国際資本移動による外国為替市場の混乱

③製造業対金融業

外国居住者に対してイギリスの銀行による融資やロンドン金融市場でのポンド建て起債を認めると、シティの国際金融センターとしての地位は強化されるが、国内での金利上昇を招くので製造業には望ましくない。

④ポンドの国際的役割

ポンドの国際的役割が再建されると、国内経済運営に問題を引き起こしたり、他のEC諸国からERMに加入する気がないと思われたりする恐れがある（cf. Ikemoto 2011）。

↓

これらのリスクはとるに値すると考えられた。

(3)サッチャー首相の立場

①原則的には為替管理撤廃に反対していなかった

②しかし、マネタリズムの実行を優先したかったことと、時期尚早な撤廃により大規模な資本流出が起こることを恐れたため、撤廃には消極的。

③サッチャーがメモランダムを受け取ったのは重要な会合が行われる僅か数日前。会合ではハウ、ノットやイングランド銀行総裁が首相を説得。

(4)資本流入規制の見送り

為替管理を撤廃すると、予想されたような国外への資本流出はおきず、逆に高金利に引きつけられた海外からの資本流入によってポンドは急上昇した。

↓

政府内部では、高金利とポンド高のダブルパンチで苦境に陥った製造業を救済するため、資本流入に対する規制が検討された

- ・規制の導入に一番積極的だったのはサッチャー首相
- ・導入に反対する大蔵省・イングランド銀行・新たに経済問題担当アドバイザーになったウォルタースらが首相を説得。

(5)後日談

- ①イギリスの経常収支が北海原油のおかげで黒字だったのは1983年まで→サッチャー政権は為替管理撤廃のために非常に限られた機会を生かした。
- ②海外からの資本流入により、イギリスのような経常赤字国がその赤字をファイナンスするのは容易になったが、このことは為替管理撤廃時にはほとんど予期されていなかった。
- ③ポンドが国際通貨としての地位を回復することはなかった。シティは国際的金融センターとしての立場を取り戻したが、取引の大半はドルで行われることになった（ドルの国際取引に占めるシェアが最も低下したのは1990年のことであり、ドルの覇権を確立したのはクリントン政権）。

首相個人文書 (PREM)

大蔵省文書 (T)

イングランド銀行文書

Brittan, Samuel, *Steering the Economy: The Role of the Treasury* (London: Secker & Warburg, 1969).

Britton, Andrew, *Macroeconomic Policy in Britain 1974-87* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991).

Campbell, John, *Margaret Thatcher: The Grocer's Daughter* (London: Pimlico, 2001).

Cannadine, David, *Margaret Thatcher: A Life and Legacy* (Oxford: Oxford University Press, 2017).

Furceri, Davide and Prakash Loungani, 'Capital Account Liberalization and Inequality', IMF Working Paper WP/15/243 (2015).

Gamble, Andrew, *Between Europe and America: The Future of British Politics* (Palgrave Macmillan, 2003).

Gibson, Heather, *The Eurocurrency Markets, Domestic Financial Policy and International Instability* (Basingstoke: Macmillan, 1989).

Goodman, John B and Louis W Pauly, 'The Obsolescence of Capital Controls? Economic Management in an Age of Global Markets', *World Politics* Vol.46 (1993), 50-82.

Harvey, David, *A Brief History of Neoliberalism* (Oxford: Oxford University Press, 2005).

Helleiner, Eric, *States and the Reemergence of Global Finance: From Bretton Woods to the 1990s* (Ithaca: Cornell University Press, 1994).

Howe, Geoffrey, *Conflict of Loyalty* (London: Pan Books, 1995)

Ikemoto, Daisuke, *European Monetary Integration, 1970-79: British and French Experiences* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011).

Jackson, Ben and Robert Saunders (eds.), *Making Thatcher's Britain* (Oxford: Oxford University Press, 2012).

Jayadev, Arjun, 'Capital Account Openness and the Labour Share of Income', *Cambridge Journal of Economics* Vol. 31 (2007), 423-443.

Kavanagh, Denis and Peter Morris, *Consensus Politics from Attlee to Major* 2nd edition (Oxford: Blackwell Publishers, 1994).

Moore, Charles, *Margaret Thatcher: The Authorised Biography, Volume One: Not for Turning* (London: Allen Lane, 2013).

Moran, Michael, *The Politics of the Financial Services Revolution: The USA, the UK and Japan*

(Basingstoke: Macmillan, 1991).

Needham, Duncan, 'The 1981 Budget: a "Dunkirk, not an Alamein"', in Duncan Needham and Anthony Hotson (eds.), *Expansionary Fiscal Contraction*.

Needham, Duncan and Anthony Hotson (eds.), *Expansionary Fiscal Contraction: The Thatcher Government's 1981 Budget in Perspective* (Cambridge: Cambridge University Press, 2014).

Stephens, Philip, *Politics and the Pound: The Tories, the Economy, and Europe* (London: Macmillan, 1996)

Thatcher, Margaret, *The Downing Street Years* (London: HarperCollins, 1993).

Thompson, Helen, *The British Conservative Government and the European Exchange Rate Mechanism, 1979-1994* (London: Pinter, 1996).

Thompson, Helen, 'Thatcherite economic legacy', in Stephen Farrall and Colin Hay (eds.), *The Legacy of Thatcherism: Assessing and Exploring Thatcherite Social and Economic Policies* (Oxford: Oxford University Press, 2014).

Vinen, Richard, *Thatcher's Britain: The Politics and Social Upheaval of the 1980s* (London: Simon & Schuster, 2009).

Vinen, Richard, 'Thatcherism and the Cold War', in Ben Jackson and Robert Saunders (eds.), *Making Thatcher's Britain* (Oxford: Oxford University Press, 2012).

Williamson, Adrian, *Conservative Economic Policymaking and the Birth of Thatcherism, 1964-1979* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2015)